平成 26 年度第 1 回　田沢湖地域審議会議事録

日　　時　平成 26 年 7 月 8 日（火）　13 時 30 分～ 15 時 05 分
場　　所　仙北市役所田沢湖庁舎　3 階　第 1 会議室
出席委員　藤川栄委員、佐藤公平委員、三浦陽一委員、吉田裕幸委員、
　　千葉みな子委員、千葉智永委員、三浦久委員　（7 名）
欠席委員　中村正孝会長、佐藤厚子副会長、千田博夫委員、浦山力委員、
　　細川俊雄委員、小松尚委員、古郡洋平委員　（7 名）

仙北市関係者
　　仙北市長　門脇光浩
　　副市長　　倉橋典夫
　　総務部長　藤村好正
　　総合産業研究所長　高橋新子
　　田沢湖地域センター所長　草彅正敏
　　観光課長　高橋和宏
　　商工課参事　大山肇浩
事　務　局
　　企画政策課長　平岡有介
　　企画政策課主査　藤原正輝
　　企画政策課主任　柏谷有紀

会議次第　１．開会
　　２．会長あいさつ
　　３．市長あいさつ
　　４．議事
　　案件 1）所得 10 ％向上の具体策について
　　案件 2）地域の現況を活かした観光産業の発展拡充を目指して
　　５．閉会

内　容
・冒頭協議
　中村会長、佐藤副会長が急遽欠席となっています。告示によりますと、会長が出席出来ない場合は副会長が議事を進めるとなっておりますが、やむを得ない状況です。出来れば委員の皆様に進行をお願いしたいところですが、急なお願いとなってしまうことから、ご了承いただければ藤村総務部長から進行をお願いしたいと思います。よろしいでしょうか。
　＜異議無し＞

・副市長あいさつ

7 月 1 日から副市長に就任致しました倉橋と申します。皆様にはこれまでも色々とお世話になってまいりました。また市役所に戻ってきましたがまだ 1 週間ほどでブランクを取り戻せていない状況です。地域審議会については合併直後の最初の地域審議会を担当させていただきました。その際に色んな方々からご意見をいただくことができました。各地域の実情等も大変勉強になった所であります。今回も角館と西木の審議会で色んなご意見をいただくことが出来ました。田沢湖の審議会の皆様にも、色々な面でご指導いただき、ご意見をいただければと思っております。どうかよろしくお願い申し上げます。

・議事　案件１）所得 10 %向上の具体策について
　　案件２）地域の現況を活かした観光産業の発展拡充を目指して

事務局　柏谷	資料説明
藤村総務部長	進め方と致しましては 1 ページから 3 ページを中心ご意見を出していただければと思います。各テーマは重なる部分もあると見受けられるため、自由な意見を出していただければと思います。
三浦久委員	思っていることを発言させてただきます。クニマスの話になりますが、2010 年から 4 年たちます。2011 年、2012 年に西湖で発見されたクニマスが 2 年で採卵しました。既に 2 世が誕生しています。山梨県では養殖の研究が進められ養殖技術が確立したと報告されていますが、その卵をもらって阿仁で研究するという話は聞いています。しかしもう 2 年もしたら山梨県でクニマスを食べれるようになる可能性もあります。その時に本家の田沢湖では、これから試験というのでは遅いと思います。県で試験をやるのはもちろん良いことだと思いますが、例えば養殖をやっている人達であれば十分クニマスの養殖は可能ではないかと思います。そういった方々の協力をもらいながら、田沢湖あるいは仙北市に行けばクニマスを食べることができるという事であれば、すごく良いと思います。田沢湖を含めて高原ではものすごく元気がありません。2010 年にクニマス関連でシンポジウムをしたり、山梨の方を呼んでお話を伺ったりしましたが、田沢湖の人にとってもクニマスはすごいチャンスだというように言われていました。クニマスを活かした形で地域の活性化につがるように出来ればいいと思っています。いつになったら仙北市でクニマスが食べれるようになるのかなという雰囲気があります。これは政治的な事も関連しているとは思いますが、なんとか現実味のあるようにしてもらいたいです。なるべく早く活用出来る様にしてもらえ

るといいと思います。本当に田沢湖はお客さんがいません。全体が元気になるようにお願いしたいと思います。

平岡企画政策課長

今クニマス里帰りプロジェクトということで、市としても県の協力を頂きながら進めているところです。その中核事業として、大沢にクニマス未来館という田沢湖再生のシンボルとなる施設を整備したいということで、議会や関係する再生計画策定検討会の方で議論を進めているところです。クニマス未来館については観光という事もありますが、それよりも先に田沢湖再生ということをメインに考えた施設にしたいと考えています。郷土資料館にある展示物の他、将来的にはクニマスの生体についても展示したいという構想も持っています。合わせて田沢湖再生に向けて、大学の先生の協力もいただきながら、研究におけるフィールドワークの拠点となるような施設活用をお願いしたいと思っています。また子供達についても田沢湖の歴史、再生に向けた取り組みついて学んでいただけるような総合的な学習時間の活用について考えているところです。これは県との協働プログラムということで、市単独で行う事業ではありません。議会の皆様のご理解をいただいたという前提で県との協議を進め、来年度には実施計画の段階まで進めて 28 年度に建設工事が出来ればということで企画政策課で取り組んでいます。今お話していただいたクニマスの増殖、放流のための施設ということですが、お話のとおり行政だけでは前には進めない暗中模索の状況です。県でもやっと阿仁の試験地でヒメマスをもちいた増殖の実験を行うということでした。来年の春には発眼卵を山梨からお譲りいただけると思っていますが、県では公式的には公表はしていません。非常にデリケートな対応となっています。市としては仙北市田沢湖の湖畔で、クニマスの増殖に関する施設を作り、田沢湖に直接放流することができないまでも、クニマスという貴重な資源を活用し、市民皆様と財産を共有できる形に持っていきたいという部分は譲れないという気持ちです。県や県外でクニマスの施設が出来る前に田沢湖畔で夢を実現するために取り組みたいと思っています。具体的な話はなかなか出来ませんが、市をあげて取り組んで行きたいと考えています。

三浦久委員

何とかお願いしたいと思います。家の近所で土器や石器を集めている方がいます。その中にはアスファルトがついたヤジなどの貴重なものがあります。クニマスだけでなく、そういったものが大沢ではでるそうです。そういったものも一緒にクニマス未来館で展示することも考えてもらえればと思います。また私の大祖父の時の資料も残っています。地域の活性化のために利用してもらえればと思いま

す。地域の宝があると思いますのでそういったものを活用して、とにかく急いでもらいわないと地域が大変になってしまいます。よろしくお願いします。

藤村総務部長　クニマスと湖畔の現状についての発言がありました。これに限らずそれぞれの得意分野、思いがあると思いますので、発言していただければと思います。

藤田委員　農協の立場から発言させていただきます。今担い手不足・若い人がいないという事で、どうやって農業生産を向上させていくかということについて取り組んでいます。神代では色んな農作物の試作をしています。あまり人手をかけないで、加工用、業務用に使うものを試作しています。来年は生保内地区でもそういった場所が造成されると思います。それもふまえて、荒れたということよりも今ある農地を如何に利用するかということです。専業農家が増えているということは大型農家が増えているということで、作る栽培面積が広くなっています。地産地消だけに頼っていては私達は食べていけないと思います。
首都圏を対象とした物作りが必要になってきます。地場産の米を使って欲しいと声をかけても、なかなか良い返事をもらえない状況でもあります。地元で活用してもらえなければ、やはり首都圏に売るしかありません。また直売所もあるにこしたことは無いけれども、売れるか売れないかわからないものを作るよりかは、確実に取引があるところに物を売った方がいいと思います。もしかしたら来年からは果樹の栽培が始まるかもしれません。冷蔵がきき、長く販売出来るぶどうです。全国的にも 3 割 4 割植えられています。あとは仙北市のブランドになるものがあるのかどうか。ブランドはすぐに出来るものなのかという疑問もあります。観光の話になりますが、今の若い人達は何を目的に訪れるのでしょうか。おそらく景色を見に来る人はそんなにいないと思います。テレビでも雑誌でもありますが、やはりグルメだと思います。食べ物がおしいくないと来ないと思います。民宿が続いているということはリピーターがいるからだと思います。若い人よりも年金暮らしの方々をいかに誘客するかだと思います。安売りだけでなく、高くてもそれなりの価値があるものを食べさせて、癒しを与える必要もあると思います。

藤村総務部長　ブランド化はなかなか難しいという発言がありましたが、それこそクニマスが食べれるようになればブランドになるのではないかなと思っています。他にご意見ありませんでしょうか。

吉田委員	藤川委員の発言にあった、地場産の物を地元業者がなかなか活用できていないという部分にですが、これは観光協会でも色々問題ができています。一番のネックはここに卸業者がいないということです。例えばお米を持ってきて欲しいといった時に、それに対応できる業者がいればいいのですがいない現状です。結局は盛岡の業者が入ってきています。地元には 1 社ありますが、そこまで対応できないということがあります。地元のお米を利用するために、観光客から地場産の米を使っているあの店が美味いというようなイメージアップを図っていかなければ、なかなか難しいのかなと思います。それと観光客数は震災以降戻っていないのが現実です。風評被害等もあると思いますが、田沢湖に来る観光客は新幹線と車では圧倒的に車が多いです。そうした中で 46 号のトンネルが酷いという意見がよくあります。岩手では震災関連で道路が非常に良くなっていますので、トンネルだけでも走りやすいようにすれば、もっと観光客が増えるのではないかと思います。もう 1 点はＪＲに交渉して東京からの新幹線料金を安くしてもらえないかという事です。安い料金だと確かにお客さんがきます。これはそんなに期間が続かないので、グリーンシーズンはずっと低料金でやっていただけないかなと。観光業者の方々の意見です。これはＪＲにあたってみていますが、秋田県だけでは無理といってます。デスティネーションキャンペーンも去年実施しましたが、残念ながら期待するほどお客さんは来ていませんでした。キャンペーンを実施して良かったのは秋田市内だと感じています。これからの我々のイベント等はお客さんが慣れてしまって飛びついてくれないということもあり、頭を悩ませている部分です。
藤村総務部長	去年の種苗交換会はどういった効果でしたか。
吉田委員	期間中はすごかったです。単発で終わってしまったので、出来れば長く続いてもらいたいという気持ちはあります。あれは秋田県でしかやっていないイベントですので、岩手や青森からもお客さんがいらしていました。
藤村総務部長	全県まわりますので、数十年に 1 回程度に開催地になるかどうかだと思います。
藤川委員	27 年後くらいになるかもしれません。
三浦久委員	車があまりに混むので帰る時にどこかによっていこうという気持ち

がでてきません。田沢湖畔は全然効果がありませんでした。部分的には良かったと思います。

藤村総務部長　他にご意見ありませんでしょうか。

三浦陽一委員　私の事を先に話たいと思います。私は農家の長男で、藤田委員のように今頃百姓をやっていたかもしれません。ただ、高校で農業簿記を学び、家の田んぼでは採算がとれないということを知りました。そういった時に減反が始まりました。そうした中で就職したのがデパートの企画宣伝で、今では 30 年ほど仕事をしています。いつも感じているのは、きっちりしたマーケティング、ブランドビジョンが無いということです。10 人いればそれぞれ考え方が違ってきます。実はそれだと戦略がありません。当時は高齢化ではなく、色んな人がいたのでそれぞれの人が良ければ良かったかもしれません。しかし今の時代にはマーケティングは大事になると思います。仙北市に 1000 万人という人が来ない事はわかっています。いわゆる数ではなくて、仮に 100 万人でもお金をちゃんと出してくれる人が来てくれたらいい話です。1 人 100 円を落とす人が 1000 万人来るよりは、1 万円を落としてくれる人が 100 万人来てくれた方が経済効果があります。それだけの中身がある地域ブランドを作っていきませんかというのが私の提案です。ブランド米がありますが、売り価格は 60 kg 当たり 3 ～ 4 万円です。おそらく生産価格の 3 倍から 4 倍かと想像しています。ちゃんと買う人がいます。東京に行けばあれだけの人がいますので色んな人がいます。どこの人をターゲットにしていくかをきちっと決めない限り、いつも右往左往の状態だと思います。クニマスの話がでましたが、なぜクニマスがいなくなったのかという事を実は地元の人達でも段々わからなくなってきています。その恵みを受けているのは仙北平野であるということを教えることで、その物語は地元にとっては辛いと思いますが、学生達にとってはすごく良い話です。ただ学生をターゲットにするかとなれば違います。ターゲットは大学教授です。大学と地域がきっちとりとした交流ができるような新たな観光の交流の仕組みを作っていくことが、戦略ではないかなと思います。クニマスだけの開発だけでなく、大沢田子の木には潟分校という 1 つの大きな資源がありますので、歴史、クニマスに関する食べられる料理などの学習を通して、クニマスをテーマした 1 つのエリアを作ることが出来ると思います。ただ産業が儲かるのではなくて、地域が元気になるという考え方が必要と思います。いわゆる各地域の戦略をもっていく必要があると思います。それが所得の向上につながっていくと思います。しかしそれを仕掛

けていく人がいないので、仕掛けるような仕組みを作ってもらいたいと思います。

千葉智永委員　農業の基幹整備についてですが、荒れた土地を修復するためにはどうしても重機が必要になるので、その貸し出しをしてもらえればと思います。人材については業者に頼めば高くなりますので、個人でやれる範囲であれば重機の貸し出しをするというような方法がいいと思いました。それと観光の部分で、那須高原に観光に行きましたが、雑木林が整備されていて周りの景色が綺麗でした。こちらの高原や湖畔は草木が整備されていない状況がみられます。杉林が多い部分もありますが、ある程度整備している方が観光客に良い印象を与えると思いました。販売部分ですが、こちらだけでの販売だけでは絶対数が少ないということもあり難しいですが、田沢湖市では首都圏に行っているということを聞いています。店での取り扱い数を多めにしてもらえれば、売る部分でも作る部分でも生産調整的な部分が出来るのではないかなと思います。それと観光部門ですが、今登山等がはやっていますので、整備して充実してほしいということと、田沢湖ではフライボードというのはどうでしょうか。取り入れる部分は市で支援してもらえれば、湖畔の方々もやりやすのではないかと思います。

藤村総務部長　登山では温泉郷から大釜あたりまではトレッキングとしてチップにて整備していますが、今年で整備が終わります。それを如何にＰＲするかという話もあります。

千葉智永委員　地元の人はほとんど知らないと思います。

高橋観光課長　トレッキングに関しては、前々から要望が強かった部分です。乳頭温泉郷内では独自にツアーを組んだりしています。

藤村総務部長　その他に意見はありませんでしょうか。

佐藤委員　生薬でこういった物を作ればいいという話がありますが、もっと仕掛けをする人が必要だと思います。その総合産業研究所は仕掛けの 1 つだと思います。極端な話をしたら、役所の業務をせず我々の背中を押すような人が必要だと思います。その人はある程度専門的な知識が必要だと思いますので、当然お金がかかります。やってみないかではなくて、やれという形で指導する人がいいのではないでしょうか。指導者を育ててもらいたい。

高橋総合産業研究所長	生薬栽培の話が出来ましたが、私は研究所で活動して4年目になりました。米以外の新規作物を導入するという最初の部分について私達の部署で担当しています。ＪＡさんと一緒にやっていますが、ある程度収益性が高い、ニーズがあるという作物ということで連携して品目の選定を行います。やはり一番感じるのは栽培指導してくれる方が身近にないいというのが、農家にとっては心もとないということでした。私達が随時、適宜指導出来ればいいですが、専門的な知識がなくて出来ないという状況です。そうするとやはりやる気あって種をまいても、栽培方法がわからなかったりすると放り出してしまいます。そういった部分は手薄になっていると思います。以前は県の普及員がまわっていましたが、県でも普及員は減らす方向です。県にもお願いはしていますが、増やしてはもらえない状況があります。新規の作物をどんどん導入していくことであれば、それを援護していく体制はすごく必要だと感じています。
千葉みな子委員	仙北市では各イベントが年間を通してたくさん実施されています。そのイベントに付随して婦人会はほとんどの行事に協力しています。その方々は年々高齢化しており、協力できる方が少なくなっています。例えば刺巻のミズバショウであれば、中堅層で自主的に協力しあって成り立っている部分もありますが、市のイベントは私達が頑張って協力したいという気持ちではあります。直売のことですが、田沢には茶立ての清水があり、田沢地域の方々が直売をしていました。しかし生保内にＪＡの直売所ができたら、お客さんが減り野菜の量や収入が減ってしまったということでした。直売所があれば所得が向上するという良いこともありますが、数が多くなれば地域にとっては収入が減るという方も出てくると思います。
三浦久委員	今の旅行者はインターネットを常に利用しています。タブレットをもって地域の情報を見ながらです。すぐに写真をとって、フェイスブックにあげたりしています。変な書き込みをされると、ガクッとくる可能性があります。美味しいと書いてもらえれば、それにつられて次のお客さんが来てくれるということもあります。特産品を販売するとしても、インターネットを活用することが条件になってくると思います。実際問題、高齢者にとってはパソコンは二の足を踏みます。インターネットを活用するような講習会を開催してもらえればありがたいと思います。
高橋観光課長	農山村体験デザイン室ではフェイスブックを実際にやれるような所までやっています。

三浦久委員　一応見ているつもりですが、販売と集客とＰＲが出来る様にと考えていますが実際は出来ないです。

高橋観光課長　デザイン室でやった時は農家民宿の方々でした。そういった時はコマーシャル的な事も含めた部分も行ったと思います。

三浦久委員　タイミングが合わなければ行かれないし、1 回行けなければ、2 回目から行くというのは億劫な気持ちになってしまいます。

藤川委員　永島敏行さんがそら豆関係で来ました。規格外はどうするのかということで、安く出荷しますと。そうしたら、分けて欲しいという事で少しわけました。自分で移動販売や直売所をやっています。千葉出身でそら豆を作った事があるようでした。マスコミにうまくのれば反応があります。山の芋は魁新聞で取り上げてもらい、すごく名前は売れました。去年は芋は全部売れてしまい、注文がきていましたが売れない状況でした。作れば売れるというのはわかりますが、やはり経費がかかります。佐藤町長の時代に、山の芋の作付けに対して補助金を出していました。種があまりに高くて、10 ㎏で 2 万円くらいします。1 反歩では 200 ㎏使います。そういった事もあり毎年作る人が減ってきています。しかし作れば売れます。高齢化になったからといってやめないで、何人かグループになってやっていけば何とかなると思います。植え付けも機械でできるので、人の手もそんなにかかりません。やはりやり方を変えていけば、高齢化になってもまだまだ潜在能力はあると思います。米で減った部分を別で挽回しようということを行っています。県や国でも補助金がでてきていますので、その辺を活用して手をあげる事が必要だと思います。

三浦陽一委員　今の話で少子高齢化はどんどん進んでいますので、5 年 10 年先を考えたら、個々の農家が農業をやっている時代ではないだろうと感じています。田沢には長芋、神代には山の芋、実はそら豆は県内ではすごい評価が高いです。良い物があるので、地域農業が地域の若い人を雇用するという時代がくると思います。60 代の世代が 100 人いれば、その跡取りは 100 人前後いました。それが今では 3 分の 1、それ以下かもしれません。そしたら維持管理は難しいです。地域で介護するのと同じように、地域で農業をするということで雇用が生まれれば収入があがると。そこに流通も組んでもらうと。お米は寒暖の差がある所がおいしいと言われています。ここで言えば西明寺、桧木内、生保内です。ところがお米のブランドといえば大潟村といった、田んぼの広いところの米が美味しいだろうというイメージがあります。食べてみ

	たら変わらずこちらの米も美味しいと思います。ところが米単価は同じくらだいと思います。そうなれば仙北市の所得は少なくなります。そこに付加価値というのを生み出して、10 俵くらいまでの値段まで上げられる仕組みを作っていく必要があると思います。どうしても値段だけが上がらないとしたら、今は夏野菜が出ていますので農家で消費出来ずに捨てられる野菜を米とセットにするという仕掛けも必要だと思います。それはどこでやるかはわかりませんが、仕掛けを行っていただければと思います。
高橋総合産業研究所長	もともと都市農村交流というのは､都市の方々が農村にいって食べる、生活文化を体験するという部分から、帰ったのちも交流ができればいいというのが目的でした。ただ、そこまで意識して行える体制があるかと言えば、農家個々でやっている方もいますができない部分もあります。そういった戦略も合わせた形で意識する部分はあってもいいと思います。
三浦陽一委員	基本形は米と味噌と醤油です。これが 3 つの原則ですので、これにプラスして何かをつけると。実際、旧南外村の農協と役場でふるさとのものを送るというキャンペーンをしばらくやったと思います。
藤川委員	田沢湖ではやっていませんが、仙北でもやっていたと思います。
三浦久委員	昔話し大学に 600 人くらい来て宴会をやりましたよね。その後も田子の木では地域の物を送っているようでした。
藤川委員	東京田沢湖会に行ったときも、もっと地元の物を食べたいという意見がありました。
三浦陽一委員	同じあきたこまちでも他県で作ったのと、秋田で作ったのでは全然違います。適材適所があると思います。単純にあきたこまちだから美味しいのではなくて、どこの場所で作ったお米ということをきちっと示すことで、結果的に仙北市のブランドになると思います。せっかく良い物があるので活かしていただきたいと思います。
高橋総合産業研究所長	それに近いもので、桧木内地域の方々で現役から退いた方々が中心となってＮＰＯを作りまして、桧木内地域出身で首都圏に在住している方達と交流を通して、自家製の味噌を作りたいと。その味噌を核として交流をしていただき、味噌を食べていただくことで農地を保全していくという取り組みも出てきています。

藤村総務部長	今減反政策がなくなるという話が出ています。私の家も少し農家やっていまして、転作制度で田んぼをハウスにした土地がありますが、田んぼには戻せないかなと。今荒れているのではなくて、転作が長くなってまた田んぼとして使えるのかと言った不安があります。転作制度がなくなったとしても田んぼが増えるのかなと思うところがあります。藤川委員はどう思いますか。
藤川委員	田んぼの転作はほとんどありません。人の土地を借りて、田んぼにならない田んぼを作ってそこに作付けをしているので、転作奨励金は私には入ってきません。その農家に入っていきます。そういったやり方の方が収入が多いと思います。おそらくですが計画作付けは無くならないと思います。
藤村総務部長	イメージとしては転作制度がなくなると思っていました。
藤村委員	実績的に生産調整ということだと思います。今はやらなければやらなくて良いと。ただしやらなければ補助金は出ないということです。この補助金がなくなるとすれば、米だけしかやれないという人が出てくると思います。しかし今で 1 万 2 千円したものが 7 千円ほどになったとすれば、どちらの相場がいいか考えればどうなのかなと思います。それと田沢湖の蕎麦は人気があるようですね。
倉橋副市長	蕎麦を作っている人は増えているようです。
藤村委員	去年は雪につぶされて食べれない所がありましたが、結構有名というか引き合いが良いらしいです。
三浦久委員	別の話になりますが、こうやって外を見れば杉林が目立ちます。この杉林ですがガニ腐れがおきています。5 年ごとに補助金ができるので、計画的に補助金がはまるように間伐していき 80 年くらいで、というつもりでやってきたのがほとんどガニが入ってしまっています。建築材になりません。それをプライウッドに出すのか、チップにするのか。植えていても何にもなりません。ガニは絶対直りません。早めに市として独自に何か方法を考えていく必要があるのではないでしょうか。全部広葉樹にしたらどれだけ良いのかなと。十和田湖の紅葉もありますが、田沢湖の周りは半分以上杉林ですので紅葉にはなりません。政策的にどうにかならないでしょうか。
藤村総務部長	それこそ計画的に植えた杉林だと思います。

藤田委員	今伐採するときは抜かずに切って、そこに広葉樹を植えたような格好にしているそうです。それでも成長するようです。伐採した後は切らなければならないという国有林の義務があって、全部一気に切るのではなくて、1 箇所を 3 回くらいに分けて広葉樹を増やしていくというようなやり方のようです。
倉橋副市長	農業の担い手ももちろん大事ですが、林業の担い手も育てなければ山が荒れる一方だと思われます。自分の林なりの境界がわからない人がどんどん増えてくると、更に荒れていくと思われます。
三浦久委員	西木は国土調査をやっていますが、田沢湖は山の調査をやっていないため、境界が全くわからない人が大半だと思います。時間がたつほど酷くなってくると思います。早めに対応することが必要だと思います。
倉橋副市長	それこそよそから募集して林業従事者を集めるくらいしなければならないかもしれません。
千葉智永委員	今は林業の映画をやっているので、やる人はいるのではないでしょうか。
藤田委員	松茸山でも出来ないでしょうか。
千葉智永委員	岩手では松茸がとれるように、大学の先生を呼んで整備したというのを聞いたことがあります。そういったことは出来ないでしょうか。
藤村総務部長	基本的に松が無く、秋田杉がほとんどという状況なので難しいかもしれません。それでは予定の時間よりも早いですが、意見がないとすればここで閉じたいと思います。今までの発言内容を事務局でまとめて、次回の審議会で内容を確認していただきたいと思います。
平岡企画政策課長	それでは今日のお話していただきました内容は、先に会議録を送らせていただきまして、その後に提言書（案）を送付させていただきます。次回の会議ではそれについて精査していただきたいと思います。以上をもちまして田沢湖地域審議会を閉じさせていただきます。ありがとうございました。 （15:05　終了）